

ひと花センター利用者実態調査の実施と結果について

稲田七海（大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）

調査の概要

1) 調査の目的

ひと花センターが2013年7月に開設してこの3月で約半年が経過しました。本調査は、ひと花センター利用者を対象に、この半年間におけるセンターの利用状況および利用者の属性と生活状況を明らかにすることを目的としています。ひと花センターはどのような人たちが利用し、利用者にとってどのような居場所となっているのか。さらに、ひと花センターを利用するようになって、利用者にとってどのような変化があったのか。これらのことを把握することで、ひと花センターの今後の事業のあり方や方向性を探る手がかりとすることを目的としています。

2) 調査実施期間

2014年2月中旬～2014年3月初旬

3) 調査対象者

ひと花センターを訪れた利用者に調査の協力を依頼し、職員と利用者の面接形式でアンケート調査を実施しました。また、利用者属性を補足する情報として、回答者に関する簡単なフェイスシートを職員に作成してもらいました。

1. ひと花センターに来ているのはどのような人か？

1) 性別、年齢、学歴

はじめに、ひと花センター利用者がどのような人たちなのか、属性について簡単に見ていきます。今回のアンケート回答者は30人、性別はすべて男性でした。年齢についてみると、平均年齢が69歳（最年少64歳、最年長76歳）、年齢構成は、65歳以上70歳以下が最も多く全体の50%を占めます（図1-1）。また、70歳以上75歳以下が40%となっており、65歳以上75歳未満が9割を占めます。

最終学歴は、小卒・中卒者がそれぞれ3%と53%とあわせて半数以上を占める一方で、大卒以上は7%確認できます（図1-3）。

2) 生活保護

生活保護受給年数をみると、2年以上5年未満が43.3%と最も多く、2年未満も含めると約6割が受給開始から5年未満となっています（図1-2）。

3) 住まい

利用者の住まいについてみると、全員が賃貸住宅に住んでいます。一般的な賃貸アパートで木造住宅が10.0%、鉄骨・鉄筋コンクリート住宅が50.0%、そして、40.0%が簡易宿泊所転用型のアパートに居住しています（図1-4）。次に住宅の広さを見ると、部屋の総面積は2畳から10畳まで幅があり、平均は4.7畳となっており、3畳、4.5畳、6畳の割合が高くなっています（図1-5）。

図1-1 年齢構成

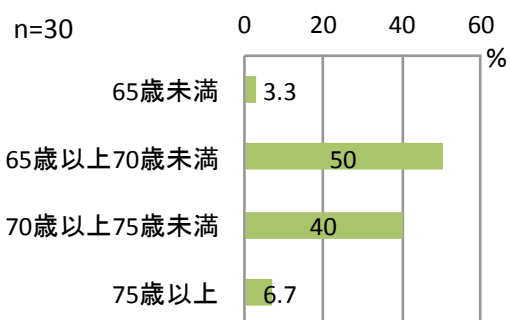


図1-2 生活保護受給年数

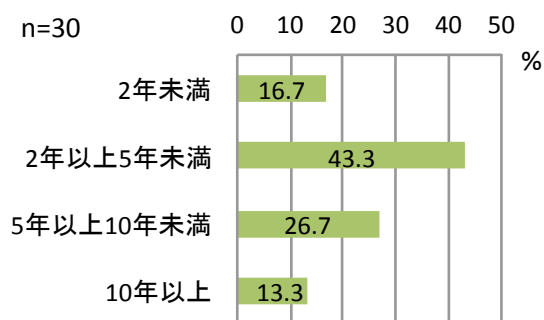


図 1-3 最終学歴

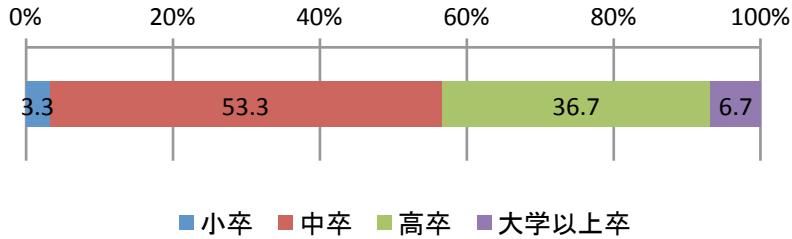


図 1-4 住宅の形態

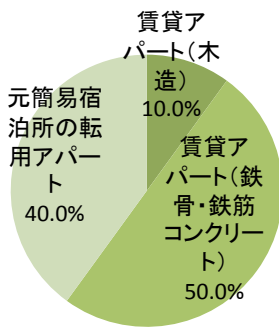
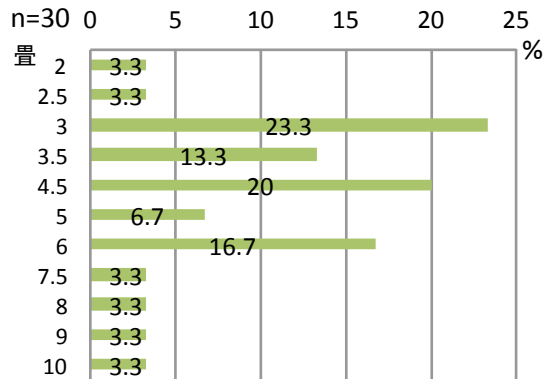


図 1-5 住宅の広さ (畳の総数)



2. 健康状態

1) 最近の健康状態

利用者の健康状態は、利用者の主観的判断とひと花センター職員の客観的判断の二つの側面から明らかにしていきます。

最近の健康状態については、56.7%がふつうと答えています。あまりよくない、よくないをあわせて20.0%、よいが23.3%確認できます(図2-1)。体に不自由や、何らかの不安を感じていると答えた人はそれぞれ40%程度確認できます(図2-2、図2-3)。自由記述欄を設けて具体的な状況についてたずねてみたところ、体の不自由にかんしては、聴力、視力、関節痛などの機能的な部分での不自由を感じている人が多く、不安に関しては、健康状況と将来的展望についての不安を抱えている人が多いことが確認できました。

図 2-1 最近の健康状態

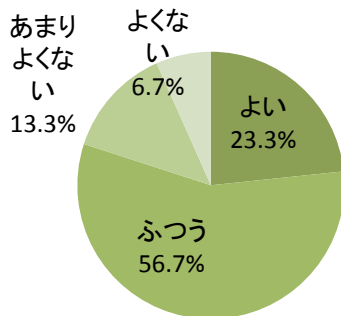


図 2-2 体の不自由

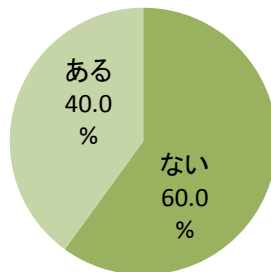
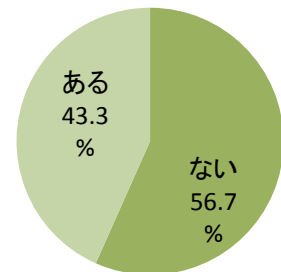


図 2-3 不安を感じる



2) 治療中の病気と通院

治療中の病気については63.3%があると答えています(図2-4)。具体的には高血圧症や腰痛などの症状を持つ人が多くなっています。あると答えた人のうち、通院している人は94.7%ですが、通院していない人も5.3%確認できます(図2-5)。通院している人の1ヶ月たりの通院回数は、2~3回が38.9%と最も多くなっています(図2-6)。

図 2-4 治療中の病気

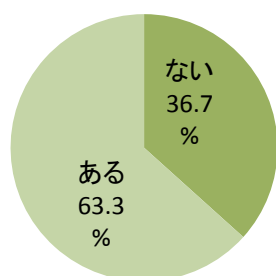


図 2-5 通院の有無

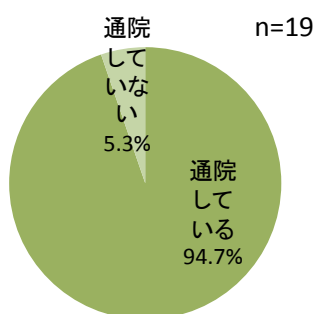
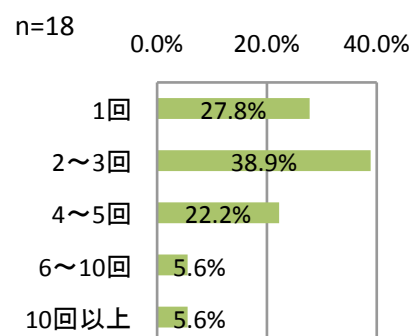


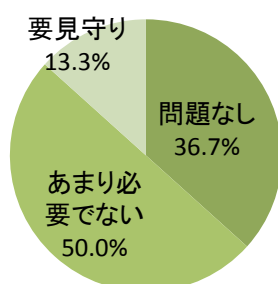
図 2-6 1ヶ月の通院の回数



3) 見守りの必要性

見守りの必要性については、36.7%が問題なしとなっていますが、要見守りが13.3%、あまり必要ではないものの、問題なしとまでは判断できない利用者が50.0%となっています（図 2-8）。

図 2-8 見守りの必要性



3. 生活状況

1) お金について

図 1-2 で示したように、受給年数は5年未満が多くを占めることから、生活保護を受給してから日の浅い人たちが多くいることがうかがえます。保護費の金額については、53.3%がなんとか足りている、13.3%が足りていないと回答しています（図 3-1）。

また、86.7%の人が生活保護費をやりくりするために何らかの工夫をしています（図 3-2-1）。具体的には、自炊する、安売りの店で買い物をするなどの食生活に関する部分での節約のほか、お酒やギャンブルなどの嗜好品や賭け事を控えるなどの工夫を行っている人が多くみられます（図 3-2-2）。

図 3-1 お金は足りているか？

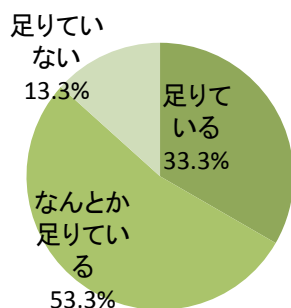


図 3-2-1 節約のために工夫していること

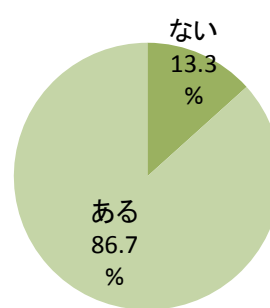
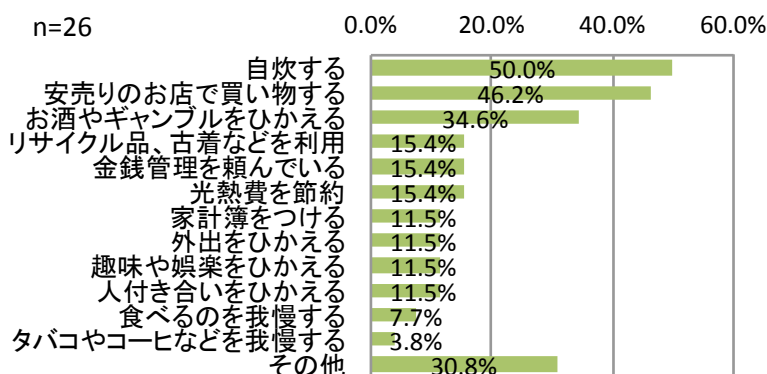


図 3-2-2 節約のために工夫していること（具体例）



2) 人付き合いやつながりについて

まず、近隣との付き合いについては、挨拶を交わす程度（56.7%）、立ち話程度の付き合い（20.0%）と答えた人が合計 70%を超え、全体的に近隣との付き合いは浅いことがうかがえます。一方で、困り事の相談（6.7%）や、ものの貸し借りや簡単な頼み事をする（3.3%）ような、親密度の高いつきあいをしている人は合計 10%確認できますが、全く付き合いのない人も 10%確認できます（図 3-3）。

図 3-3 近所との付き合い

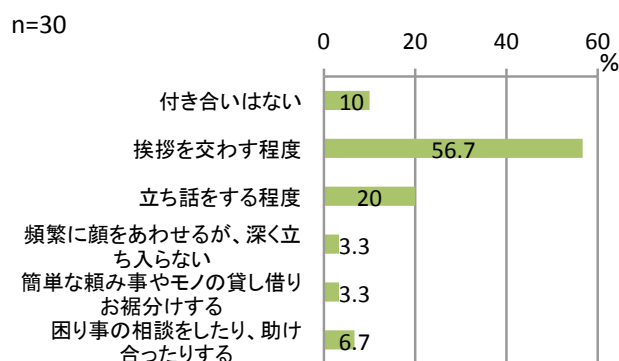
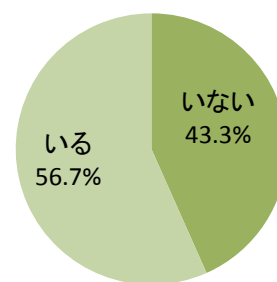


図 3-4 共通の話題や趣味をもつ友人



次に、共通の話題や趣味を持つ友人の有無について、いると答えた人は 56.7%、いないと答えた人は 43.3%となっており、半数ちかくの人が親しい友人がいないという状況にあります（図 3-4）。

こうした付き合いの中で、困り事がある時に相談できるような人が存在するののかについて尋ねてみたところ、相談ができる人がいると答えた人は 60.0%、いないと答えた人は 40.0%です（図 3-5-1）。

図 3-5-1 困りごとを相談できる人

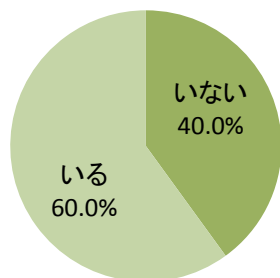
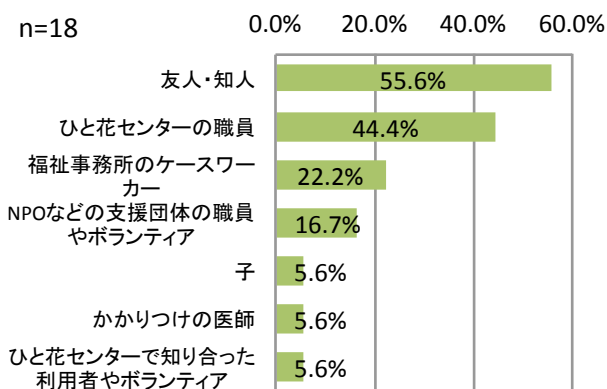


図 3-5-2 困りごとの相談相手（具体例）



さらに、困り事の相談相手がどのような人かたずねてみたところ、友人・知人が 55.6%と最も多く、次にひと花センターの職員が 44.4%と続き、3番目に福祉事務所のケースワーカーが 22.2%と続きます（図 3-5-2）。困り事がある場合は、公的な機関に相談する前に、友人・知人や、日常的に顔を合わすことの

できるひと花センターの職員などのように身近なつながりを頼る傾向にあるようです。

3) 日頃の楽しみについて

日頃の楽しみについては 93.3%がある、6.7%が無いとなっています（図 3-7-1）。日々の楽しみとしては、ひと花センターでの活動が最も多く、次に趣味や娯楽に関する活動が続きます（図 3-7-2）。楽しみの中には、お酒やギャンブルをあげている人たちも確認できます。飲酒、ギャンブルの習慣については、飲酒の習慣がある人は 60.0%、ギャンブルの習慣がある人は 53.0%となっています（図 3-8）。

図 3-7-1 日頃の楽しみ

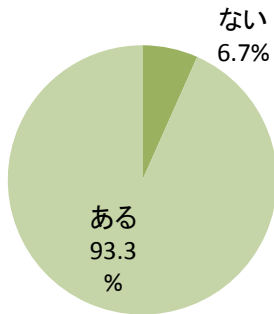


図 3-7-2 日頃の楽しみ（具体例）

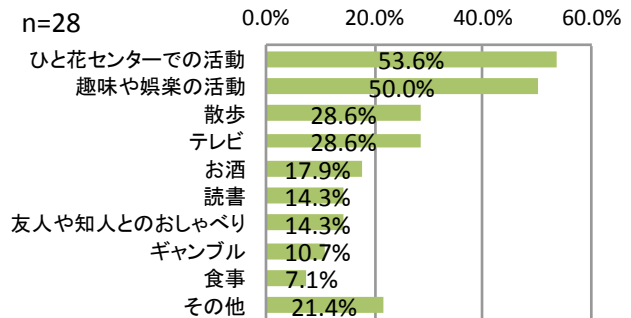
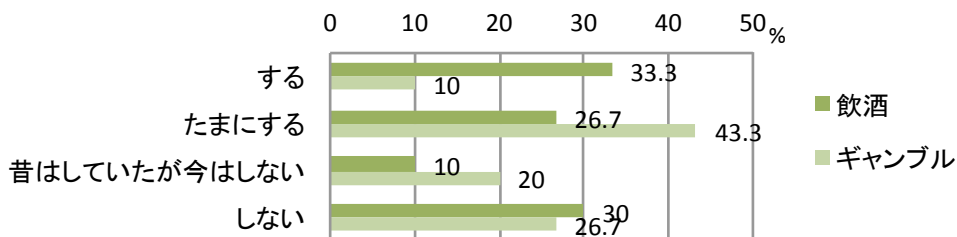


図 3-8 飲酒・ギャンブルの習慣

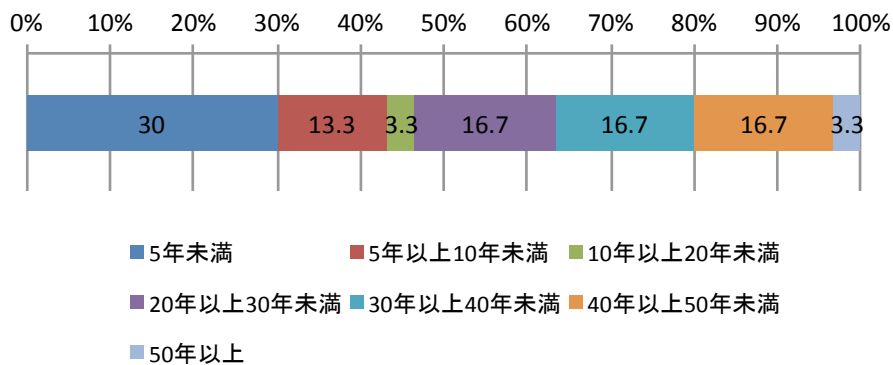


4. 地域とのかかわり

1) 西成での生活期間ときっかけ

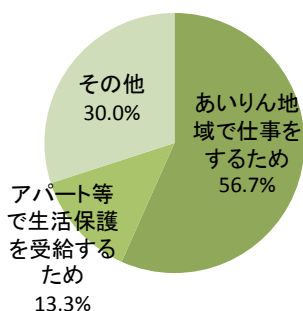
次に地域での生活について見ていきます。まず、利用者の西成に住み続けている期間については、2014年3月現在で1ヶ月未満から50年以上とかなりの幅とばらつきがあります。図をみると20年以上西成で生活している人が半数以上にのぼりますが、一方で5年未満の西成での生活を始めてまだ日が浅い人が3分の1を占めることがわかります（図 4-1）。

図 4-1 西成での生活年数



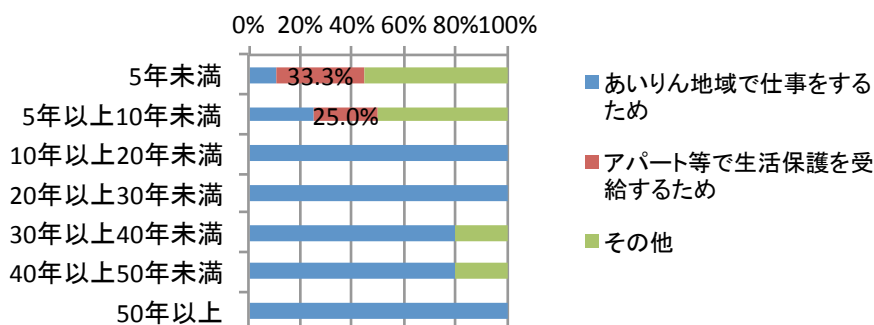
西成で生活を始めるきっかけは、あいりん地区で仕事をするためと答えた人が 56.7%と半数以上を占めます。その一方で、アパート等で生活保護を受給するために西成にやってきた人たちは 13.3%に留まります（図 4-2）。その他の理由の中には、友人が住んでいたから西成にやってきたと答えた人が数人確認できました。

図 4-2 西成で生活をはじめたきっかけ



さらに、生活年数区分別に生活をはじめたきっかけを見てみると、生活年数が10年未満では、アパート等で生活保護を受給するために西成にやってきた人がそれぞれ20%~30%以上確認できます。しかし、生活年数が10年以上になると、生活保護受給がきっかけとなっているケースは確認できません(図4-3)。

図 4-3 生活年数と西成で生活をはじめたきっかけ



2) 地域での活動について

次に、地域生活についてみていきます。地域での行事や活動への参加に関しては、よくしているが16.7%、ある程度よくしているが23.3%となり、参加をしている人は合計で40%確認できます(図4-4)。活動内容についてみてみると、ボランティア活動が突出して高く66.7%を占めます。その他、地域のお祭りなどの伝統行事、趣味や娯楽に関する活動があわせて約40%を占めています(図4-5)。

図 4-4 地域での行事や活動への参加

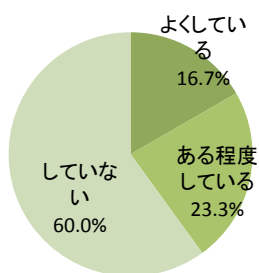


図 4-5 活動内容

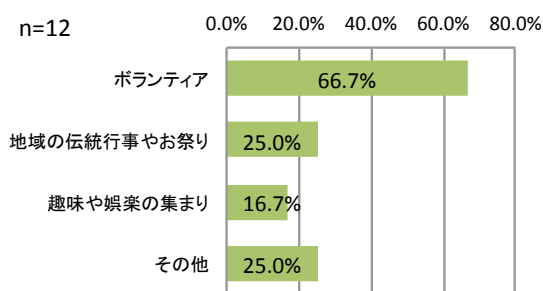


図 4-6 活動のきっかけ

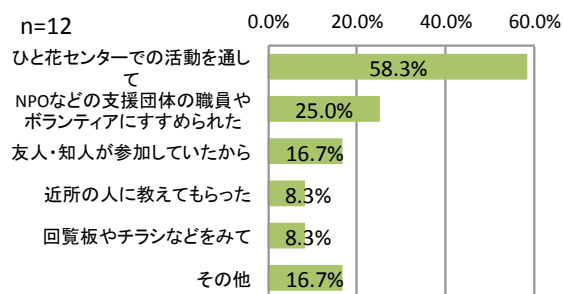
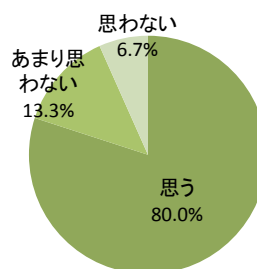


図 4-7 世の中の役に立ちたいか?



こうした活動に参加するきっかけとしては、ひと花センターでの活動を通して参加と答えた人が 58.3% となっています。その他、NPO などの支援団体関連の人にすすめられて参加している人が 25.0% となっており、ひと花センターや支援団体をとおして地域の活動に参加する人が 8 割以上を占めます (図 4-6)。

このようにボランティア活動への参加が多い背景には、利用者の地域のために役に立ちたいという思いが反映されていると考えることができます。図 4-7 をみると、利用者の 80% が地域の役に立ちたいという意識を持っていることがわかります。

5. ひと花センターの利用について

1) 利用実態について

ここでは、ひと花センターの利用実態についてみていきます。まず、1 週間のうちひと花センターに通う回数は、1~2 回が 46.7%、3~4 回が 23.3%、ほぼ毎日が 30.0% となっています (図 5-1)。ひと花センターに通ういちばんの目的については、実施されているプログラムへの参加目的が 36.7%、地域や社会に貢献をするために 23.3% となっています (図 5-2)。

プログラムへの参加状況についてみてみると、公園の草刈りや地域清掃活動が 53.3% と最も多く、次に農作業 (46.7%)、レクリエーション (43.3%) と続きますが、単に居場所として利用している人も 33.3% 確認できます (図 5-3)。

図 5-1 ひと花センターに通う回数 (週あたり)

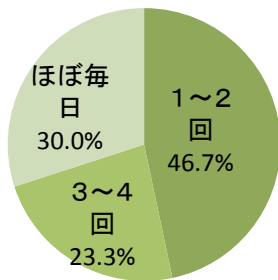


図 5-2 ひと花センターに通ういちばんの目的

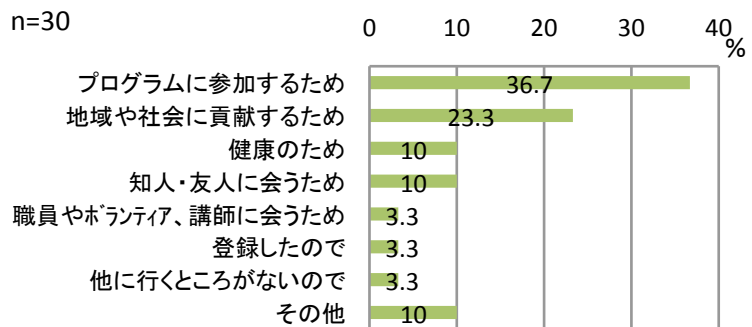


図 5-3 参加しているプログラム

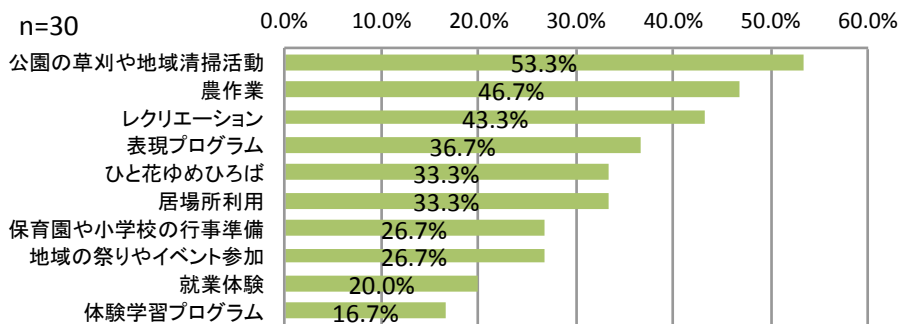


図 5-4-1 ひと花センター以外に通う場所

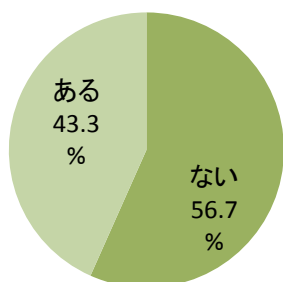
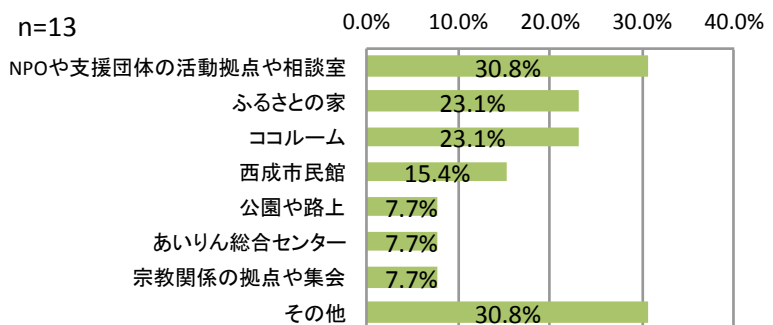


図 5-4-2 ひと花センター以外に通う場所 (具体例)



また、ひと花センター以外に通う場所の有無について訪ねたところ、あるが 43.3%、ないが 56.7%となっており、ひと花センター以外に定期的に通える場所を持たない人が半数以上確認できました（図 5-4-1）。

あると答えた人のうち、具体的な通い先は、NPO や支援団体の相談室が 30.8%、ふるさとの家とコロシアムがそれぞれ 23.1%となっています（図 5-4-2）。また、その他が 30.0%と多くを占めていますが、この内訳は図書館と喫茶店となっています。

2) ひと花センターはどのような居場所か

ひと花センターが利用者にとってどのような居場所になっているかということについてみていきます。アンケートでは、居場所としての意味を示す 26 項目（図 5-5）を用意し、1. 居場所としてはまるもの、2. あてはまるもののうち最も当てはまるもの、3. 今はそうではないがそうなりとよいものをそれぞれ選んでもらいました。ここでは、1 から 3 についてそれぞれの上位 5 ～ 6 位までの項目を示しています。

まず、「1. あてはまる」については、楽しいと感じる場、安心できる場所、素直にいられる場、幸せを感じる場が上位に確認できます（図 5-6）。

次に、「2. もっともあてはまる」については、楽しいと感じる場が最上位ですが、2 位以下は、仲間がいる・活動メンバーであると感じる場、多くの人とのつながりが感じられる場を選択した人がそれぞれ 7 割以上確認できます（図 5-7）。

図 5-5 「居場所としての意味」を示す 26 項目一覧

1 楽しいと感じる場	14 日常（生活）から離れることができる場
2 安心できる場	15 役に立っていると感じる場
3 素直にいられる場	16 自分の好きなように出来る場
4 幸せを感じる場	17 自分だけの時間を持つことができる場
5 仲間がいる・活動のメンバーであると感じる場	18 自分に自信が持てる場
6 多くの人とのつながりが感じられる場	19 この場所には自分の役割があると感じる場
7 自由だと感じる場	20 自分の力が発揮できる場
8 自分らしくいられる場	21 自分が成長できると感じる場
9 自分をわかって（理解して）くれる人がいる場	22 生活（費）の足しになる場
10 ポーツとできる場	23 他人に気をつかわなくていい場
11 自分について考えることができる場	24 他人のペースに合わせなくてよい場
12 人から受け入れられていると感じる場	25 ほしいものが手に入る、もらえる場
13 チャレンジ（挑戦）することができる場	26 その他

図 5-6 居場所としてあてはまる

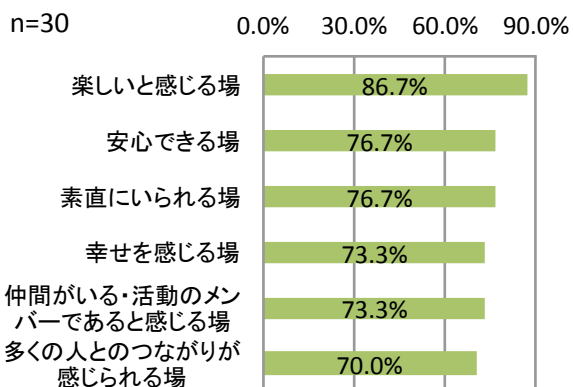
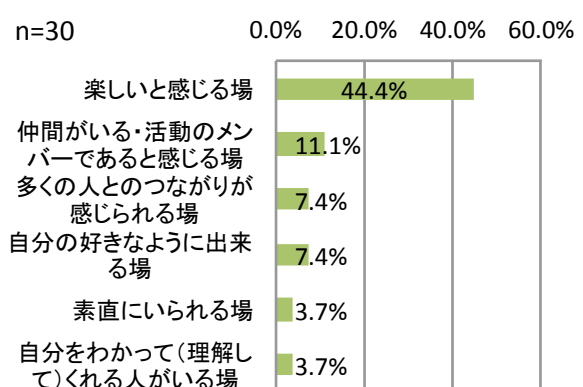


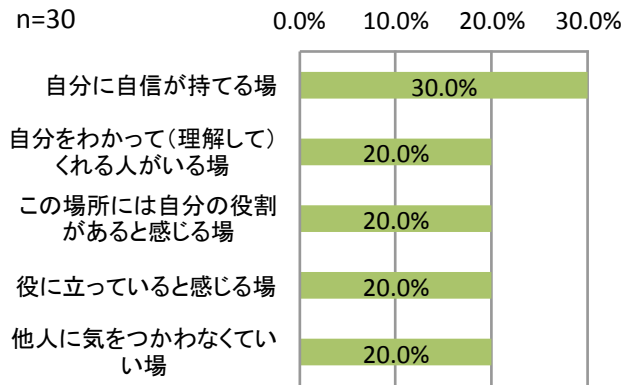
図 5-7 居場所としてもっともあてはまる



最後に、「3. 今はそうではないがそうなりとよいもの」については、最上位が自分に自信が持てる場となっており、自分をわかってくれる人がいる場、この場所には自分の役割がある場、が続きます（図 5-8）。

利用者にとってのひと花センターは、現状では、仲間がいて人とのつながりが感じられる楽しい居場所であるが、今後は自分に自信が持てて役に立っていると感じられる場になるとよい、という希望が強いことがわかります。

図 5-8 居場所として今後そうなりとよい



3) ひと花センターを利用して変化したこと

ひと花センターを利用して変化したことについてみていきます。アンケートでは、健康や生活のリズムに関すること、食生活や身の回りのこと、地域での活動やコミュニケーションに関する 24 項目について 5 段階で評価してもらいました¹⁾。また、ひと花センター職員の客観的評価による利用者の変化についてもあわせてみていきます。

まず、職員の客観的判断による利用者の変化については、40.0%の利用者に対して大きな変化が確認でき、56.7%の利用者に対して変化の兆しが現れつつあるとなっており、利用者の大部分に何らかの変化があったと判断しています(図 6-1)。

次に、利用者による評価をみると、まず、健康や身の回りのことに関して最も変化が見られたのは、精神的な落ち着き(よくなった、とてもよくなった、の合計 73.4%、以下同様)となっています。このほか、物事を前向きに考えられる(60.0%)、生活のリズム(63.3%)、自分自身の体調や気持ちを気づかう(53.3%)などが、ひと花センター利用後に好転している傾向がわかります(図 6-2)。

コミュニケーションや地域のつながりについては、仕事やボランティア活動への意欲(66.6%)人の役に立つことや社会へ貢献したい(63.7%)、地域の活動への参加(56.7%)のように、ボランティアをはじめとする地域や社会との関わりに関する変化が顕著に現れていることがわかります(図 6-3)。

図 6-1 客観的判断による変化

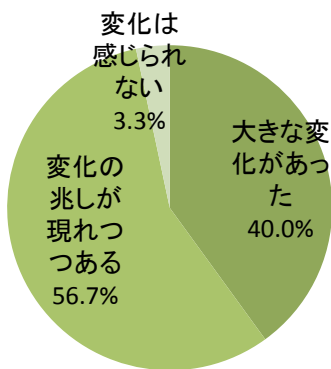
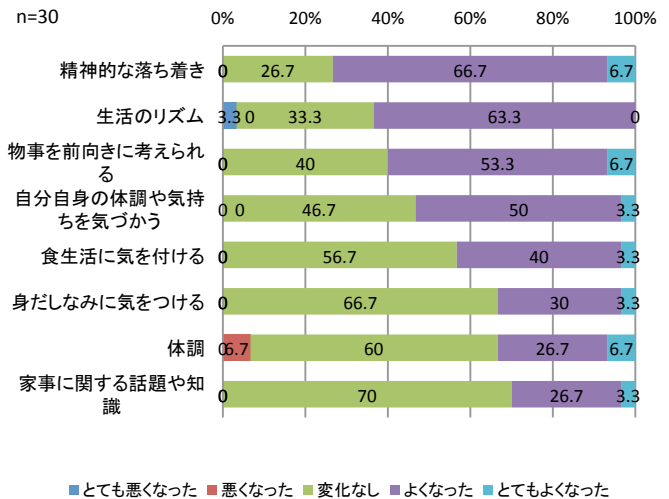


図 6-2 健康や身の回りのこと



孤独や不安、不調に関しては、お酒の量が減った、とても減ったが合計 33.3%、ギャンブルの回数が減った 40.0%、お金の無駄遣いが減った 20.0%となっています(図 6-4)。これらのプラスの変化がみられる一方で、自分への死の不安、人付き合いの悩みなどの不安が増えた人もわずかですが確認できます。利用者の生活にひと花センターでの活動が新たに組み込まれることで、人間関係が動いたり、生活

¹⁾ 健康や身の回りのこと、コミュニケーションや地域のつながりについては、状況や回数についてのプラスの変化を昇順(1→5)で示しています。孤独や不安、不調に関することは、マイナスの変化を昇順(1→5)で示しています。それぞれの図の凡例を確認してください。

のリズムに変化が生じたりしたことが、ストレスになっているのかもしれませんが。

図 6-3 コミュニケーションや地域のつながり

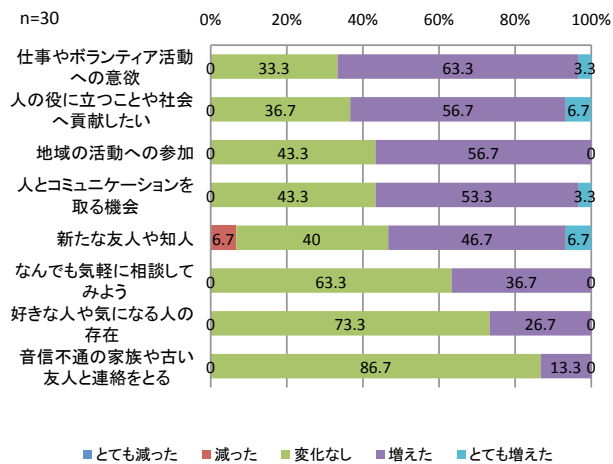
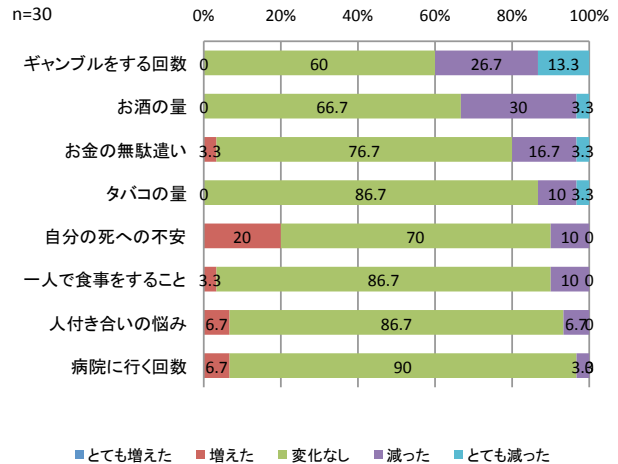


図 6-4 孤独や不安、不調



6. 調査結果のまとめとこれからの課題

今回の調査の結果から、ひと花センターの利用者像について一定の傾向や特徴が見えてきました。まず、利用者のほとんどは年齢的に高齢者のカテゴリーに入りますが、ひと花センターの提供するプログラムにも積極的に参加できるような比較的良好な健康状態にある人たちです。生活保護の受給期間は6割が5年未満となっており、生活保護受給を開始して比較的日子が浅い人たちが中心となっています。また、西成で生活している期間には1ヶ月未満から50年以上と大きな幅があり、生活期間が短い人ほど、生活保護を受給するために西成にやってくる傾向にあることがわかりました。生活状況については、生活費を節約するためにさまざまな工夫をしていることがうかがえます。

一方で利用者の半数以上にギャンブルやお酒などの浪費につながる可能性のある習慣が確認されますが、それらは数ある楽しみの一つに過ぎず、ひと花センターに通うことや趣味や娯楽など、日常の楽しみには多様性があることが確認できました。また、地域のつながりや人のつながりについては、近隣とは挨拶をする程度の関係性に留まりますが、6割が親しい友人を持ち、困りごとなどがあっても友人や知人に相談する傾向にあります。家族・親族との縁が薄く、単身で生活している利用者にとっては、友人・知人の存在が大きいことがうかがえます。

そして、今回の調査結果で特筆すべきは、ひと花センターを含む地域の支援団体の存在が利用者の地域生活において大きな意味を持つという点です。ひと花センターや支援団体の拠点のようにプログラムの実施や相談・雑談場所を提供する場合は、単身の生活保護受給者にとって地域とのつながりをもたらす唯一の場所になっています。ひと花センターで実施されているプログラムで最も参加率が高いのが、草刈りや地域の清掃活動です。さらに、利用者のセンター利用の目的として地域・社会貢献が二番目に高くなっています。このことから、利用者は「世間の役に立ちたい」という意識を、ひと花センターでのプログラムをとおして結実させることが可能となり、利用者と地域が結びつき混ざり合うような機会を得ています。すなわち、ひと花センターは利用者と地域を結びつける結節点のような役割を担い、ひいては利用者のような単身者の孤立を防ぐ取り組みとして機能し始めています。

こうした取り組みは、利用者の健康や身の回りのこと、コミュニケーションや地域のつながりに大きな変化をもたらしており、孤独や不安、不調の解消にもつながりつつあります。また、居場所としてのひと花センターは、楽しく仲間とのつながりを感じられる場所としてだけでなく、今後は自分に自信が持て役に立てていると感じられる場になるとよいという利用者の希望も明らかになりました。ここで明らかになった利用者の変化のプロセスや今後の希望を利用者ニーズとしてとらえ、利用者自身が将来的展望を持ちながら地域や社会と結びつくことのできる場として、ひと花センターの今後の継続性が求められます。